

新田 哲夫 (金沢大学)

tnitta@staff.kanazawa-u.ac.jp

要旨

多良間方言は三型アクセント体系を有しており、HLの「下降」のほかLHの「上昇」もアクセントの実現として現れる。発表者はこの下降と上昇の双方を説明するために、「韻律語」の末位モーラが常に低くなる「アクセント低核」(...L*)を設定することを提案する。また、このアクセント低核を前提に名詞句アクセントの分析を行う。種々の形式を検証した結果、この方言の名詞句アクセントパターンは義務的に主要部(被修飾部)の韻律語に核をもつパターンが現れることが明らかになった。これは名詞句境界を直前の韻律語に核を付与することで示す機能を担うものと考えられる。東京方言等で見られる前部従属部が無核化することで名詞句のまとまりを示すこととは対照的である。東京方言等の句のまとめ方は、「前部無核化まとめ」方式であるのに対し、多良間方言は「終端有核化区切り」方式と呼べるものである。

1. 目的

多良間島は南琉球の宮古島と石垣島の上に位置し、面積約20km²、人口約1100人の島である。ここで話されている多良間方言のアクセントは、「三型アクセント体系」を有しており、「韻律語」と呼ばれる南琉球に特有な韻律的単位を設定することによって適切に分析できることが、これまでの研究で明らかになっている(松森2010,2014、五十嵐2015,2016、青井2016)。本発表では、これらの韻律語を「主韻律語」と「副韻律語」にわけて扱い、韻律語の連続に現れる「下降」と「上昇」の現象を取り上げる。この二つのアクセントに関わる現象を「アクセント低核」を用いて説明しようとする。さらに名詞句アクセントについて、種々の名詞句、すなわち(i)指示詞+名詞+助詞、(ii)形容詞語根+名詞+助詞、(iii)指示詞+形容詞語根+名詞+助詞、の3形式を用意し、「XのY」、「XのYのZ」の連体修飾構造の名詞句と比較検討する¹。

2. 韻律語

この方言では「韻律語」を設定することで、三型アクセント体系が最もうまく説明できることがわかっている(松森2014、五十嵐2015,2016、青井2016)。発表者は「韻律語」(以下、韻律語を()で括る。)を「主韻律語」と「副韻律語」の2種にわける。「主韻律語」は後で示す、A型B型C型の各型の指定を受けるもので、「副韻律語」はその指定を受けないものである。「主韻律語」は名詞単独、動詞・形容詞などの1個の語根を含む成分で、「副韻律語」は名詞につく2モーラ以上の助詞(連続)、動詞・形容詞句内の語根以外の成分である。また、複合語の後部要素(と1モーラの助詞が付いたもの)も「副韻律語」として扱うことができる。「副韻律語」は(1)では斜体で示す²。

¹ 以下、音韻表記のうち、N, M, V, Lなどのキャピタルは1子音で1モーラを形成する音。iはいわゆる舌先母音(中舌母音)。音素表記のボールドはそのセグメントがHの音調、], ↓で音調の下降を、[, ↑で上昇を表す。

² 副韻律語を設ける積極的な理由に関して、ここでは詳述できないが、先んじて概略をいえば、後述のB型の現れ方に関わる。-nu《が》などの1モーラの助詞が付いた韻律語で、aL《ある》, neeN《ない》などの述語が続いた場合、A:(kubanu)(aL), B:(maminu)(aL)...で現れABの区別を失う。これはB:(maminu)...に続く述語(aL), (neeN)が副韻律語ではなく、主韻律語であるためB型の2番目の韻律語の音調型の下降が現れず、A型と同じ音調型で現れたと考えている。B型で2番目の韻律語に核が置けるのは、それが副韻律語の場合のみである。

韻律語は2モーラ以上で形成される。「1モーラ語は韻律語になれない」という韻律語形成に関する強い制約がある(五十嵐2015)。1モーラの助詞、-nu‘主格、属格’、-ja‘主題’、-tu‘共核’、-u~ju‘対格’などは、それが付く前の自立語といっしょになって、一つの韻律語を形成する。

(1) さまざまな韻律語(斜体は副韻律語)

- a. (tarama)《多良間[地名]》, (kaki)《書く》, (miiL)《見る》
- b. (kaki) (taL)《書いた》, (mii) (raiL)《見られる、見える》, (katamii) (butaL)《運んでいる》
- c. (imi) (sjaal)《小さい》, (imisja) (daal)《小さい[強調]》
- d. (tarama-nu)《多良間が、の》, (tarama-u)《多良間を》
- e. (tarama) (mai)《多良間も》, (tarama) (kara)《多良間から》, (tarama) (kara-du)《多良間からぞ》
- f. (tarama) (Msju)《多良間味噌》, (adaN) (gii)《アダン木》, (Msju) (gami)《味噌瓶》
- g. (adaN) (gii-nu)《アダン木が、の》, (Msju) (gami-u)《味噌瓶を》, (adaN) (gii) (mai)《アダン木も》

3. 三型アクセント体系

この方言では韻律語が2つ並ぶときA型B型C型の3つの型の区別が現れる。なお、以下の名詞の例では、主に2モーラ助詞 mai《も》(副韻律語)が付き、あとに述語 aL《ある》、neeN《ない》、miiraiL《見える》が続く「接続形」を考察の対象とする。

3.1 文頭の下降と文中の上昇

ここでは名詞+助詞の2つの韻律語の音調に関し、文頭と文中にわけて現れ方をみる。青井(2018)にある文例を用いて調査を行っている。

(2)の文頭では下降の有無、下降がどこの韻律語に現れるかで3つの型が区別される。Aは下降なし、Bは2番目の韻律語の次末位で下降、Cは1番目の韻律語の次末位で下降が生じている。(3)の文頭をみても、複合語後部要素 gii《木》は、(2)の単純語につく助詞 mai《も》と同じ扱いにすることで、3つの型をとらえられることがわかる。

一方この方言では、下降だけでなく、上昇もアクセントの実現である点が特徴的である(青井2018, 新田2018)。(2)の文中では、(ada↓N) (mai)が文頭でその後続く形式、(3)の文中では、(ada↓N) (gii) (mai)が文頭でその後続く形式があがっている。(2)(3)の文中とも「~も~も」の形式であるが、同一名詞を避けるために、(2)Cでは、adaNの代わりに gazima《ガジュマル》を用いている。

(2) 文頭と文中(Cの後)の韻律語(単純語)

文頭	文中【☐=(ada↓N) (mai)の後】
A: kuba=mai... 《クバも》 (kuba) (mai)...	☐...kuba=mai miiraiL 《(アダンも)クバも見える》 ...(kuba) (mai) (mii) (raiL)
B: mami=mai... 《豆も》 (mami) (ma↓i)...	☐...mami=mai miiraiL 《(アダンも)豆も》 ...(mami) (mai)↑(mii) (raiL)
C: adaN=mai... 《アダンも》 (ada↓N) (mai)...	☐...gazima=mai miiraiL 《(アダンも)ガジュマルも》 ...(gazima)↑(mai) (mii) (raiL) cf. 文頭 C: (gazi↓ma) (mai)

(3) 文頭と文中 (C の後) の韻律語 (複合語)

文頭	文中【 \square = (ada↓N) (gii) (mai) の後】
A: kuba+gii=mai... 《クバ木も》 (kuba) (gii) (mai)...	\square ...kuba=gii=mai miiraL 《(アダン木も)クバ木も見える》 ...(kuba) (gii) (mai) (mii) (raiL)
B: mami+gii=mai... 《豆木も》 (mami) (gi↓i) (mai)...	\square ...mami+gii=mai miiraiL 《(アダン木も)豆木も見える》 ...(mami) (gii)↑(mai) (mii) (raiL)
C: adaN+gii=mai... 《アダン木も》 (ada↓N) (gii) (mai)...	\square ...gazima+gii=mai miiraiL 《(アダン木も)ガジュマル木も見える》 ...(gazima)↑(gii) (mai) (mii) (raiL)

文頭で下降が見られた B と C で、文中に上昇が観察される。重要な点はその上昇の位置が、下降の位置より 1 モーラ後ろにあることである。注目すべき点は、(2) 文中 B の... (mami) (mai)↑(mii) (raiL)に見られるように、上昇の影響が次の文節（ここでは述語）にまで及ぶ点、また上昇するとそのまま H を保持していく点である。

3.2 文中に上昇が現れない場合

文中でも A の (kuba) (mai) の後に続く場合は、上昇が現れず、文中でも、文頭の音調型と同じパターンが現れる（ここでも同一名詞をさけるため、kuba の代わりに A: jaroo 《テリハボク》を用いている）。

(4) 文頭と文中 (A の後) の韻律語 (単純語)

文頭	文中【 \square = (kuba) (mai) の後】
A: kuba=mai... 《クバも》 (kuba) (mai)...	\square ...jaroo=mai miiraiL 《(クバも)テリハボクも見える》 ...(jaraoo) (mai) (mii) (raiL)
B: mami=mai... 《豆も》 (mami) (ma↓i)...	\square ...mami=mai miiraiL 《(クバも)豆も見える》 ...(mami) (ma↓i) (mii) (raiL)
C: adaN=mai... 《アダンも》 (ada↓N) (mai)...	\square ...adaN=mai miiraiL 《(クバも)アダンも見える》 ...(ada↓N) (mai) (mii) (raiL)

文中で A=kuba+gii=mai が先行する例をここにはあげてないが、(4)の kuba=mai の場合と同じである。また文中で B=mami=mai... 《豆も》、 B=mami+gii=mai... 《豆木も》が先行する例も省略するが、後半の実現の仕方は、C が先行する(2) (3)の例と同じである。すなわち、文中の B と C で上昇が現れるのは、前の韻律語が下降した後、後に続く当該韻律語が低く始まる時である。

3.3 アクセント低核

これら「下降」と「上昇」の双方はアクセントの実現と考えられる。この相反する二つの音調の動きを一つの特徴としてまとめるために、発表者は、「アクセント低核」を想定する。手がかりとなるのは、「上昇」の位置が、「下降」の位置よりも常に 1 モーラ後ろにずれている点である。従来、この方言のアクセント核（下げ核）が韻律語の次末位にあると考えられていたが、このアクセント低核は韻律語の末位にあると設定し直す。以下、アクセント低核を「*」で表す。

(5) アクセント低核による三型体系

- A 型 (...μ)(...μ) 無核。
- B 型 (...μ)(...μ*) 有核。主韻律語の隣の副韻律語の末位に核をもつ。
- C 型 (...μ*)(...μ) 有核。主韻律語の末位に核をもつ。

このアクセント低核はそれが置かれたモーラが常に低く実現する(...L*)。この有核の韻律語は 2 種の環境的変異形をもつ。有核の韻律語が文頭に置かれた場合、もしくは文中で前の韻律語が高く終われば、それに続く核のある韻律語も高く始まり、(H↓L*), (HH↓L*), (HHH↓L*)のように実現する。有核の韻律語が文中で現れ、その前の韻律語が低く終われば、当該韻律語も低く始まり、核のあるモーラの次のモーラを上昇させる。すなわち(LL*↑), (LLL*↑), (LLLL*↑)。下げ核が次を下げる力を有すると考えるのと同様に、この低核も次を上げる作用が順行的に働く。ただし、これら 2 種の有核韻律語は環境的変異であり、下降と上昇が同時に現れるのではなく、環境に依存して選択的に現れるのである。核をもたない無核の韻律語も(HH), (HHH), (HHHH), あるいは(LL), (LLL), (LLLL)も同様の環境に依存している。これらの変異をまとめると(6)のようになる。

(6) 韻律語の変異形

有核	H 韻律語・L 有核	L 韻律語・L 有核
(μμ*)	(H↓L*)	(LL*↑)
(μμμ*)	(HH↓L*)	(LLL*↑)
(μμμμ*)	(HHH↓L*)	(LLLL*↑)
無核	H 韻律語・H 無核	L 韻律語・L 無核
(μμ)	(HH)	(LL)
(μμμ)	(HHH)	(LLL)
(μμμμ)	(HHHH)	(LLLL)

H で始まる有核・無核の韻律語は「H 韻律語」と呼ぶ。文頭か前の韻律語が高く終わった場合にそれに続いて現れる。L で始まる韻律語は「L 韻律語」と呼ぶ。文中で前の韻律語が低く終わった場合にそれに続いて現れる。「H 韻律語」「L 韻律語」のそれぞれの有核無核を「H 有核」「H 無核」「L 有核」「L 無核」とよぶ。「L 無核」のあとに「L 韻律語」が続くのは同化の原則であるが、「L 有核」のあとは核の作用によって強制的に「H 韻律語」になる。まとめると(7)のようになる。

(7) H 韻律語と L 韻律語の環境

- 文頭 (H 韻律語)...
- 文中 (...H) (H 韻律語)
- (...L) (L 韻律語)
- (...L*) (H 韻律語)

3.4 韻律語変異の現れ方

(3)の例について、型指定√^A, √^B, √^C と有核の韻律語に低核を付して、韻律語の変異をラベル付けすると

(8)、(9)、(10)のようになる。

(8) $\sqrt{C}adaN+gii=mai \sqrt{A}kuba+gii=mai...$ 《アダン木もクバ木も...》

(adaN*) (gii) (mai) (kuba) (gii) (mai)...

$\begin{matrix} H & L & L & L & L & L \\ \text{有核} & \text{無核} & \text{無核} & \text{無核} & \text{無核} & \text{無核} \\ HHL & LL & LL & LL & LL & LL \end{matrix}$

(9) $\sqrt{C}adaN+gii=mai \sqrt{B}mami+gii=mai...$ 《アダン木も豆木も...》

(adaN*) (gii) (mai) (mami) (gii*) (mai)...

$\begin{matrix} H & L & L & L & L & H \\ \text{有核} & \text{無核} & \text{無核} & \text{無核} & \text{有核} & \text{無核} \\ HHL & LL & LL & LL & LL & HH \end{matrix}$

(10) $\sqrt{C}adaN+gii=mai \sqrt{C}gazima+gii=mai...$ 《アダン木もカジュマル木も...》

(adaN*) (gii) (mai) (gazima*) (gii) (mai)...

$\begin{matrix} H & L & L & L & H & H \\ \text{有核} & \text{無核} & \text{無核} & \text{有核} & \text{無核} & \text{無核} \\ HHL & LL & LL & LLL & HH & HH \end{matrix}$

4. 名詞句のアクセント

本発表ではさらに、この「アクセント低核」を前提に、これまで詳しい分析がなかった名詞句のアクセントについても報告する。

4.1 指示詞+名詞+助詞

指示詞 kunu 《この》、unu 《その》などに後続する名詞 (A型:kuba 《クバ》、B型:jama 《山》、C型:adaN 《アダン》) に mai が続く「接続形」の例である。ここでは文頭に現れる音調型を扱うが、文中でも核の位置は変わらない。(11)では、名詞句の主要部がすべて有核になり、名詞句全体の区別をなくす。すなわち、(指示詞)(有核名詞)(助詞)のパタンとなる。

(11) 指示詞+名詞+助詞

A: (unu) (kuba*) (mai)... 《そのクバも》 cf. A: (kuba) (mai)... 《クバも》

$\begin{matrix} HH & HL & LL & & & \\ & & & HH & HH & \end{matrix}$

B: (unu) (jama*) (mai)... 《その山も》 cf. B: (jama) (mai*)... 《山も》

$\begin{matrix} HH & HL & LL & & & \\ & & & HH & HL & \end{matrix}$

C: (unu) (adaN*) (mai)... 《そのアダンも》 cf. C: (adaN*) (mai)... 《アダンも》

$\begin{matrix} HH & HHL & LL & & & \\ & & & HHL & LL & \end{matrix}$

4.2 形容詞語根+名詞+助詞

多良間方言は宮古諸方言同様、形容詞語根が高い生産性をともなって複合語を形成する(下地 2018 いう PC 語根)。多良間方言の形容詞はいわゆるサアリ系に分類され、名詞化接辞-sa-が口蓋化し語尾は-sjaaL で現れる。アクセント上は無核類と有核類に分類される。例えば、無核類: (bida) (sjaaL) 《低い》、有核類: (taka*) (sjaaL) 《高い》など。(12)では形容詞語根には核は現れず、有核類・無核類の区別は名詞句の主要部の核の現れ方に反映する。

(12) 形容詞語根+名詞+助詞

A: (bida) (kuba) (mai)... (bida) (ku↓ba*) (mai)... (taka) (ku↓ba*) (mai)...

B: **(bida) (jama) (mai)...** **(bida) (ja↓ma*) (mai)...** **(taka) (ja↓ma*) (mai)...**
 C: **(bida) (adaN) (mai)...** **(bida) (ada↓N*) (mai)...** **(taka) (ada↓N*) (mai)...**

無核類 bida 《低》に続く形式は、名詞句全体が無核になるものとすべての主要部が有核になるものとの併用である。有核類 taka 《高》の場合は主要部有核の形式しかない。これは形容詞語根の無核・有核の「型保存」と4.1の「指示詞～」で見たように、「主要部はすべて有核」が併存しているものと考えられる。有核類が前に付いた場合は、「型保存」と「主要部有核」の二つは同一の現れ方である。

4.3 指示詞+形容詞語根+名詞+助詞

(13) 指示詞+形容詞語根+名詞+助詞

A: **(unu) (bida) (ku↓ba*) (mai)...** **(unu) (taka) (ku↓ba*) (mai)...**
 B: **(unu) (bida) (ja↓ma*) (mai)...** **(unu) (taka) (ja↓ma*) (mai)...**
 C: **(unu) (bida) (ada↓N*) (mai)...** **(unu) (taka) (ada↓N*) (mai)...**

指示詞+形容詞語根+名詞+助詞では、(11)のパタンに従って上記の(13)のようになる。すなわち、形容詞語根+名詞がひとまとまりになり、(指示詞)(有核名詞)(助詞)のパタンになる。ここでも形容詞語根の有核無核類の区別、主要部の型の区別は無効となり、すべての主要部が有核名詞となる。

4.4 名詞句主要部の有核化

ここで観察された名詞句アクセントに関する現象は、この方言の複合語アクセントの「型保存」とも異なるパタンをとる。まず、名詞+名詞の複合語は、前部要素の型が支配する「型保存」が成り立っていたが、形容詞語根を含む複合語は、さらに複雑で、「主要部有核化」を含むものである。形容詞語根が前部要素となる複合語と名詞どうしの複合語との相違点がここにも現れている。形容詞語根の複合語は、指示詞を前接部にもつ形式や、後に示す連体修飾構造に近い性質も兼ね備えているのである。

この「主要部有核化」は、すでに五十嵐(2015)、青井(2018)で記述のある「X=nu Y」《XのY》の現象と相通じるところがある。

(14) 「X=nu Y」のパタン

X=nu A=mai... (A: paa 《葉》)	X=nu B=mai... (B: nii 《根》)	X=nu C=mai... (C: eegu 《唄》)
A: kuba=nu paa=mai... 《クバの》	kuba=nu nii=mai...	kuba=nu eegu=mai...
(kubanu) (pa↓a*) (mai)	(kubanu) (ni↓i*) (mai)	(kubanu) (ee↓gu*) (mai)
B: mami=nu paa=mai... 《豆の》	mami=nu nii=mai...	mami=nu eegu=mai...
(maminu) (pa↓a*) (mai)	(maminu) (ni↓i*) (mai)	(maminu) (ee↓gu*) (mai)
C: adaN=nu paa=mai... 《アダンの》	adaN=nu nii=mai...	adaN=nu eegu=mai...
(adaN↓nu*) (paa*↑) (mai)	(adaN↓nu*) (nii*↑) (mai)	(adaN↓nu*) (eegu*↑) (mai)

「X=nu Y」の連体修飾構造において、XYがどんな型に属していようが、Yは有核になる。すなわち、

(Anu)(Y*), (Bnu)(Y*), (Cnu*)(Y*)となる (X が C のとき、修飾部の C 型の核は残り、この名詞句内で核が二つ現れることも注目すべき点である)。

3 項の「X=nu Y=nu Z」構造の場合について、限られた範囲で述べると次のようになる。

2 項の(Xnu)(Y*)で Y が必ず有核になるので、3 項「X=nu Y=nu Z」の X が A 型 B 型の場合は、前 2 項(Xnu Y*)に =nu Z が付いたものと解釈され、かつ、ここでも主要部 Z に核が現れ、(Xnu)(Ynu*)(Z*)となる (例: (kubanu)(paa↓nu*)(ui*↑)(mai)...《クバの葉の上も》A: paa《葉》, A: ui《上》)。ただし X が C 型のとき、2 項の(Xnu*)(Y*)のように 2 つの核が現れることから、3 項の「X=nu Y=nu Z」では、(Xnu*)(Ynu*)(Z*)が予想される。しかしそうはならず前核だけが残り、(Xnu*)(Ynu)(Z*)となる (例: (adaN↓nu*)(eegunu)(buduL*↑)(mai)...《アダンの唄の踊りも》C: eegu《唄》, A: buduL《踊り》)。今のところ第 2 項の Y に核が現れないことについての説明が難しい。しかし、「X=nu Y」「X=nu Y=nu Z」の名詞句の最後に位置する主要部に、核を義務的に置くのは確かである。

これらの連体修飾構造の主要部に核をもつのは、おそらく統語的なまとまりの終端を名詞句の主要部を有核にすることによって示す方式をとっているものと考えられる。

指示詞を含む名詞句や形容詞語根を含む名詞句の主要部に核が置かれるのも、こうした名詞句の終端を示す機能の現れであろう。いわば、多良間方言は「終端有核化区切り」方式を組織的に用いている方言と言える。多良間方言の名詞句アクセントの形成法は、類型論的に興味深い事例と言えよう。

また、多良間方言のこの方式は、従来知られている東京方言等の(連)文節のパタンとも大きく異なる。例えば、東京方言で語末核をもつ /ヤマ/《山》は、次のような名詞句を形成する。例: ヤ[マ]モ、コ[ノヤマ]モ、コ[ノマルイヤマ]モ、コ[ノタカ]イヤマ]モ。句頭の上昇によってその始まりを明示するが、主要部の核は無核化しないし、位置も不変である。ただし語末核をもつ名詞「山の～」「男の～」が連体修飾構造の前部になるとき、ヤ[マノ、オ[トコノと語末核を無核化して名詞句全体を一体化させる方式をとることができる。名詞の場合は限定的であるが、「前部無核化まとめ」方式をとっていると言える。その他、名詞が副詞になると無核化する現象も、動詞句を一つにまとめようとする類似の現象と言えよう (例: /キノー/《名詞: 昨日》に対して、/キノー/《副詞》キ[ノー イッタ《昨日行った》など)。

参考文献

- 青井隼人 (2016) 「南琉球宮古多良間方言の三型アクセント: その特徴と型の中和」『音声研究』20 (3): 76–81.
- 青井隼人 (2018) 「南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇: 複数の韻律句が連続する場合のピッチパターンの記述」『国立国語研究所論集』14: 1–27.
- 五十嵐陽介 (2015) 「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文学文化研究』1–42, 広島大学大学院文学研究科総合人間学講座.
- 五十嵐陽介 (2016) 「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150: 33–57.
- 下地理則 (2018) 『南琉球宮古語伊良部方言』シリーズ記述文法 1, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 新田哲夫 (2018) 「南琉球多良間方言アクセントの下降と上昇」国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」第 2 回合同研究発表会レジュメ (国立国語研究所 2018 年 2 月 18 日) .
- 松森晶子 (2010) 「多良間島の 3 型アクセントと『系列別語彙』」上野善道監修『日本語研究の 12 章』490–503, 明治書院.
- 松森晶子 (2014) 「多良間島のアクセントを再検討する」『日本女子大学紀要 文学部』63: 13–36, 日本女子大学文学部.
- 松森晶子 (2016) 「八重山諸島黒島方言のアクセントの仕組み—その韻律範疇 PWd と下がり目の出現条件」『言語研究』150: 59–85.